

～ 宇佐宮の水田開発に表れた先駆的で多彩な農業土木技術の集合と適合 ～

申請施設は、大分県宇佐市の『平田井路』と『広瀬井路』である。平田井路と広瀬井路は駅館川を水源とし、西側平野部と東側台地部にかんがい用水を供給する。1156年に開削された平田井路の用水路は、左岸側の取水口から平野部を約12km貫流し、約140haの水田開発を可能にした。その後も用水路の延伸と新田開発が進み、1603年には水田面積は約463haとなり、1765年には約653ha、1924年には約1100haまで拡大した。さらに、国営駅館川総合開発事業等を経て、現在の平田井路では幹線水路全長25.6km、受益面積1546haとなっている。平田井路が築造された平安後期、宇佐神宮は藤原氏や平氏と強い関わりをもち、九州では最大となる15,000haの荘園を有していた。宇佐神宮の荘園としては近隣の田染荘（国の重要文化的景観）などが有名であるが、平田井路にも農業水利に関する文化や社会背景を示すものが残されている。一方、広瀬井路は、駅館川東側の台地の水田開発を目指して、1751年に宇佐神宮の財政的な支援により築造がはじまった。しかし、西側平野部に比べて約20m高い位置にある台地部に用水を供給するためには駅館川上流の山地部から取水する必要があり、工事は地盤崩落により進まなかった。計画から120年の歳月と5度の挑戦を経て、1870年（明治3年）に庄屋の南一郎平らの尽力によって広瀬井路は完成を迎えた。長い工事期間の中で農業土木技術の発展があり、広瀬井路には、山体を貫通する隧道、石橋の水路橋、逆サイフォン水路をはじめとする様々な工法が取り入れられている。現在、広瀬井路の幹線水路全長は37.1km、受益面積は1641haである。水田の拡大に伴う用水需給状況の悪化に伴い、平田井路と広瀬井路では、数多くの分水工が設けられ、厳格な分水ルールが作られてきた。時水とよばれる時間あるいは分単位で細かく決められた分水制度は現在も維持されている。こうした農業水利の歴史や独特な農耕文化、持続的な農業が世界的にも評価され、2013年に宇佐は国東半島とともに世界農業遺産に選ばれている。



平田井路（古地図）



広瀬井路（古地図）



藤ヶ谷水路橋（広瀬井路）



平田井路（子ども体験教室）



宇佐のかんがい用水群
（平田井路・広瀬井路）
（大分県）

日本国内位置図